

第 103 回山口西田讀書會

2016 年 3 月 5 日（土）1 時 30 分より 3 時 45 分

第 102 回（2 月 27 日）の Protokol

参加者：谷、千葉、奈原、藤村、植田、岡田、桑原、佐野（計 8 人）

1. 第 102 回（2 月 27 日）の哲学的問い：「生命進化の歴史を踏まえれば、人間の要求は、宗教的要求以前から存在する命に発しており、宗教的要求から分化したものではないのではないか」について。

まずこの問いは、人類がまず誕生し、それから宗教が発生したという視点に立っていることが確認された。（歴史は過去から現在に至るという見方が、そもそも現在を起点にして成り立っており、その意味で歴史は現在から開かれてくるとも言える。筆者）

ついでこの問いでは「宗教的要求」とは人間が起す要求であると考えられているが、第 4 編第 1 章「宗教的要求」のテキストでは必ずしもそうなっていないことが確認された。すなわちそこでは要求の主体が「真正の宗教」「キリスト」「大なる生命」「厳粛なる意志」となっている。その意味では「人間の要求は…命に発している」といえるが、すでに意識的となった「人間の要求」は「大なる生命」の要求に直接してはおらず、知と意志に関して無知と悪や罪に曝されるところで「大なる生命」の要求が「宗教的要求」という形で起こってくる、ということが確認された。

2. テキスト講読：第 3 篇第 2 章「行為下」第 4～6 段落

第 3 篇第 2 章「行為下」は「行為」を哲学的に論じた箇所である。すなわち「行為の基たる意志の統一力なるものがいずこより起るか」、また「実在上においてこの力はいかなる意義をもっているか」を問題にしている。結論として西田は意志は実在統一力の最も深遠なる所から」起こり、意志はこの「実在の根本」たる実在統一力に他ならないとする。この「実在統一力」とは「宇宙の根本」たる神に他ならない。宇宙の統一力と意志の統一力が最も深遠なる所で一つだというのが西田の考えである。

第 2 段落では「意志の統一は何より起るか」についての「科学者の見地」が紹介され、第 3 段落ではそれに対する西田の反論が述べられる。議論はいささか錯綜しているが、全くの偶然からは機械的運動のような「一定不変の現象」は成立しえないし、単なる機械的運動からは有機体の合目的なる現象も生じえない、というのが根拠のようである。西田は結論として「合目的なる自然がおのが真意を発揮する、と考えた方がよい」としている。これは宇宙がその誕生から全体として合目的的な力を潜在させており、その力によって宇宙が自らを実現する、という考え方であり、実在の根本的な力を意志と見る見方に直結する。第 4 段落では直接経験（純粹経験）の立場から意志がどのようなものであるかが論じられている。この立場では物体の機械的運動も意識現象であり、我々の論理的統一によって成立するということになるが、有機体の合目的運動となると統一はさらに深遠となり、

ついに我々の意志にいたって「最も深き統一力」ということになる。これはどこまでも説明のつかぬ、その意味で分からぬものであるが、我々はこの「自己の意志を通して幽玄なる自然の真意義を捕捉することが出来る」とされる。「捕捉」とは自得の意に他ならない。それは「あたかも単に木であり石であると思っていたものが、その真意義においては慈悲円満なる仏像である」が如くであるが、仏像の内に慈悲円満を見るが如く、自然の内に深遠なる宇宙の統一力を見るためには、美術家の如きすぐれた目を養わなければならない。この点について第2編第8章「自然」の第4, 5段落が参照された。

第5段落では物質力と意志を同一とする点で科学者と西田の見方は一致するが、科学者は物質力を本とし、西田は意志を本とする点で正反対であることが述べられ、第6段落ではさらに意志と動作（物的運動）が同一物の両側面であることが述べられる。

次いで第3章「意志の自由」に入る前に「自由はあるか」について自由にディスカッションが行われた。そのなかで人間には自殺の自由があるため、人間は根本的に自由であるが、それ故にこの自由を持て余す。それ故神の規律の如き大枠を決めることによって人間の自由が生きて来る、という某氏の説が奈原氏より紹介された。その他にも、自由を選択意志の自由と解する説や、考えるのは何を考えることも出来る、という意味で自由であるが、実現はそうではないとする説、人間の全てが肉体的にも精神的にもすべてイデオロギーや制度によって制約されており、自由はない、などの説が紹介された。

哲学的問：宇宙が合目的的だというのは本当だろうか。美術家のような目を養えばそれが見えるというのが西田の主張であるが、絵画にもいろいろありそうだ。ムンクの「叫び」などどうだろうか。宇宙は無意味な偶然の繰り返しに過ぎないとは考えられないか。この二つの見方をどのように総合的に考えたらいいのだろう。

佐野記